

初期仏教における生天の根拠付け

石 上 和 敬

1) 問題の所在

初期仏教聖典において、「善行を積んで、死後、天界に生まれる」といういわゆる生天思想は在家者への教説の中心をなすものである。この生天が説かれる場合問題となるのは、生天は基本的に死後の事柄であり、生きている人間にとっては超経験的な出来事である点である。つまり、生天を説く者は、人間にとって超経験的な生天を、何らかの方便を用いて対告者に納得させなくてはならないのである。本発表では、ニカーヤの中でその点に対する説法者並びに經典編者の努力の跡を辿ってみることにする。

尚、最初に断っておくべきは、ニカーヤにおいて生天に言及する場合、生天の根拠にまでは逐一言及されていないのが普通であり、以下に紹介する如き根拠付けにまで言及する事例は例外的な、少数の事例であるということである。

見通しを良くするために概略を先に述べるならば、本発表では生天を根拠付ける方策を4つにまとめてみた。第一には天眼 (dibba cakkhu) による確認を根拠付けにするもの。第二には既に生天した者達による告知。第三には天界に住む者達と共通の資質を備えることを根拠とするもの。そして第四には、比喩による根拠付けである。以下各々若干の事例を紹介してゆく。尚、テキストは PTS 版を用いる。

2) 天眼による根拠付け

さて、説法者が生天を確認することができるという立場に立つ時、最も有力な根拠として言及されるのは、天眼 (dibba cakkhu) であろう。すなわち、説法者である仏陀や仏弟子達は天眼を備えているが故に衆生の生まれ変わり死に変わりする一部始終を見ることができるというわけである。この天眼は atikkantamān-usaka と形容される如く、一般の人間の能力を超越したものであるもので、説法者が天眼を根拠とする以上、対告者は説法者の所説に従わざるを得なかったのでは

ろう。いくつかの事例を見てみよう。

Majjhimanikāya の Bhayabheravasutta では三明 (tisso vijjā) の第2, 生死智 (cutūpapātañāna) の説明中に、天眼によって衆生の生まれ変わりを見ることができるという内容が見られる。ここは、仏陀が成道までの自らの修行課程を述懐するという設定で、四禪を修め、その後に三明が獲得されるという文脈である。

so dibbena cakkhunā visuddhena atikkantamānusakena satte passāmi cavamāne upapajjamāne, hīne panite suvaṇṇe dubbaṇṇe sugate duggate, yathākamūpage satte pajānāmi. —(MN1, 22, 30-32)

そこで、私は清浄で超人間的な天眼によって衆生達が死に変わり生まれ変わりつつあるのを見る。衆生達にはその行為に従って、卑しいものと優れたもの、美しいものと醜いもの、善処に赴くものと悪処に赴くものがあるのを知る。

引用部分に引き続いて、衆生達は善行により天界に生まれ、悪行により地獄に生まれた、と天眼によって見られた内容が詳述される。次に掲げる事例は三明とは関連しない部分であるがやはり天眼によって生天が確認されると言われる。

Majjhimanikāya の Mahākammavibhaṅgasutta の事例である。

idh' ānanda ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā…tathārūpaṃ cetosamādhim phusati. yathā samāhite citte dibbena cakkhunā visuddhena atikkantamānusakena amuṃ puggalaṃ passati idha pāṇātipātā paṭivirataṃ…sammāditthim kāyassa bhedā parammaraṇā passati sugatim saggaṃ locaṃ upapannaṃ. (MN 3, 211, 15-21)

アーナンダよ、ここに、ある沙門或いはバラモンは、……次のような心の三昧を獲得する。すなわち、そのように心を定めると、清浄で超人間的な天眼によって、ある人が、この世で殺生を離れ、……(十善)……正見を備え、命が尽きて善処である天界に生まれたのを見ることができる、そのような定である。

以上が天眼によって生天を含む衆生の生まれ変わりを確認できるとされる事例の代表的なものである。

2) 生天者による告知

ニカーヤでは、天界から天人達が地上に降りてきて、どのような条件を満たした人が生天できるのかを語っている事例がしばしば見られる。天人達が降下するという設定がいかなる歴史的事実を反映しているのかという議論はここでは措くけれども、実際に生天を経験した者が生天について語るという設定であるから、根拠付けという面からのみ判断すれば聞くものに納得のいく内容であったであろう¹⁾。

3) 天人と共通の特性を持つことによる根拠付け

Dighanikāya の Tevijjasutta において、仏陀が Vāseṭṭha バラモンに対して「梵天達の仲間になるための道」(brahmāṇaṃ saṃvayātāya magga) を説いている。四梵住 (brahmavihāra) 等の梵天達の仲間になるための道を説いた後、梵天と比丘とが共通の特性を備えることにより、死後に共に住することができると説いている。肝要な部分のみ示す。

iti kira vāseṭṭha apariggaho bhikkhu apariggaho brahmā, api nu kho apariggahassa bhikkhuno apariggahena brahmunā saddhiṃ saṃsandati sametīti.

evaṃ bho gotama.

sādhū vāseṭṭha. so vata vāseṭṭha apariggaho bhikkhu kāyassa bhedā parammaraṇā apariggahassa brahmuṇo saṃvayūpago bhavissatīti. tṭhānam etaṃ vijjati. (DN1, 252, 1-7)

パーセッタよ、このように比丘は執着がなく、梵天も執着がない。執着のない比丘が執着のない梵天と一緒に出会って、合い集うことはありえるだろうか。

ゴータマよ、あり得ます。

よろしい、パーセッタよ、パーセッタよ、実に、その執着のない比丘は命が尽きて執着のない梵天の仲間に生まれる、というこのようなことは道理がある。

このように、四梵住を修めた比丘は「執着がない (apariggaha)」等の点で梵天と共通の資質を備えることにより、死後に梵天の仲間に生まれることができる、と説かれる。つまり、天人と共通の資質を備えることが、生天の根拠とされているわけである。ニカーヤにおいては、布施や持戒等の善行を行じる等の特定の条件を満たせば生天できる、という表現は頻繁に見られるけれども、その場合にも、何故その条件を満たせば生天できるのか、という根拠が示されていることは少ない。上掲の事例はその根拠、すなわち、天人と共通の資質を備えることとなるが故に、という根拠が明示されている点で貴重な事例である。

4) 比喩による根拠付け

最後に、生天やそれを確認する天眼の存在を比喩を用いて説明しようとしている事例を紹介する。

Dighanikāya の Pāyāsiyuttanta は外道に帰依していた王族パーヤーシと仏教出家者のクマラ迦葉の対論を中心に構成されている。パーヤーシは「別の世界が

なく、衆生達の生まれ変わりがなく、善悪の行為の果報である異熟がない。」(n'atthi paraloko n'atthi sattā opapātikā n'atthi sukaṭa-dukkatānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko.) という主張、言い換えれば、生天などはないという主張を持っていたが、それをクマラ迦葉が論破するという展開である。概略以下のよう内容である。(DN 2, 322, 35-326, 4 を要約)

パーヤーンは言う。「仏教者は十善を行じれば死後に生天すると主張するが、ひとたび天界に生まれた者がこの世に帰ってきて天界に生まれたことを報告したり、使者をこの世に遣わせたりすることがないではないか。故に、別の世界や、生まれ変わりなどはないのである。」クマラ迦葉はそれを論破するために比喩を示す。「屋外便所 (gūthakūpa) に落ちた人を助け揚げて、綺麗にし、種々に楽しませたとする。その人は再び屋外便所に落ちようとするであろうか。」パーヤーンは答える。「そういうことはない。」クマラ迦葉は言う。「天界に比べると、人間界は屋外便所のように非常に汚い場所である。したがって、一度天界に生まれた者が、再び汚れた人間界に戻ろうとはしないのである。」

この比喩は「別の世界がなく、云々」の説を否定するとにより、「別の世界あり、云々」の説を間接的に認めさせようとしているものである。そのことは同時に、善行によって生天することをも認めさせることになっている。

さて、このような比喩が外道のパーヤーンを納得させるのに十分であったことは、彼が、「私は迦葉尊者の (示した) 第一の比喩だけで満足し納得した。」(purimen' evāhaṃ opammaṇa bhoto kassapassa attamaṇo abhiraddho.) と言うことより明らかである²⁾。

次に示す事例は、生天を確認するには不可欠である天眼の存在を比喩を用いて理解させようとするものである。やはり Pāyāsisuttanta の事例である。少々長いが関連部分を要約する。(DN 2, 326, 12-329, 26 を要約)

パーヤーンは言う。「五戒を守っている死期の迫った知人に対して、仏教者の主張するように五戒を守れば死後忉利天界に生まれるということが真実か否かを報告してくれるように頼んだ。その人は死んだけれども、その人からの報告は未だに受けていない。故に、「別の世界はなく、云々」である。」クマラ迦葉は言う。「忉利天界の一昼夜は人間界の百年に相当する。生天した者が忉利天界で二三昼夜ゆっくりするだけで、その生天した者が人間界に戻ってくる時期は大変に遅くなる。あなたはそれらの報告を受けることができるであろうか。」パーヤーンはそれに対して、その事を逆手にとって、ならば逆に忉利天界があるなどと告

げる人もいないではないか、と反論する。それに対して、クマーラ迦葉は直接的にはそれに答えずに、切利天界がない等と言うのは生来の盲人 (jaccandha) が色彩の違いなどは存在しないというのと同じである。別の世界はこの肉眼では見られないのである。天眼によってのみ切利天界や衆生の生まれ変わりを知ることができるのである。

ここでは、肉眼と天眼の関係は、あたかも盲人と正常な人の如くであるとされる³⁾。

5) まとめ

以上、生天を根拠付けるための説法者、並びに經典編者の努力の跡を辿ってみた。要点をまとめれば、まず、生天を根拠付けるためには天眼が非常に重要な役割を担っていた。

また、実際に天人達が地上に降りてくるという設定、また、梵天達と共通の資質を備えることが生天の根拠とされている事例も見られた。更に、生天が超経験的な事柄である故、比喩による説明もある程度説得力があったようである。

-
- 1) 如上の内容は以下の諸經に見られる。Saṃyuttanikāya の sagātha-vagga 中の devatāsaṃyutta, vana-saṃyutta, Dighanikāya の Mahāgovinda, Mahāsamaya, Sakkapañha, Anguttaranikāya の 9.19. 等。
 - 2) 但し、ここで言う第一の比喩とは本論で引用した比喩ではなく、その前に示された比喩のことを指すのであるが、ここに示した比喩の内容についても納得したことは前後の文脈より明らかである。
 - 3) また、Majjhimanikāya の Mahāsihanāda でも天眼が比喩をもって説かれている。(MN 1-18)

〈キーワード〉 生天, ニカーヤ, 天眼

(東京大学大学院)